

東西の文化に足場を求めて

船 木 満 洲 夫

『古事記』（武田祐吉訳注）を読んでいると、「上つ巻」の伊耶那岐命と伊耶那美命の神々の誕生に関する話（でききらない「一処」にでき過ぎた「一処」をさしこむ……）に改めて目を見張りましたが、女の方が先にものを言うのはよくないとされているのは、日本の文化風習と結びついたものでありましょうか。天照大御神が須佐之男命の性的乱暴を恐れて、天の石屋戸の中に身を隠した叙述など人間的な感じがします。また『古事記』の歌には魅力的なのが多く、例えば「中つ巻」の次の歌の素朴さはどうでしょう——「葦原の葦の繁った小屋に／菅の蓆を清らかに敷いて、／二人で寝たことだったね」。倭建命と美夜受比売の婚前の歌も捨て難いものですが、「下つ巻」にこんなのが目にとまりました——「笹の葉に藪が音を立てる。／そのようにしっかりと共に寝ることができたなら、／よしや君は別れても。／いとしさにまかせて、共寝ができたなら、／あの刈り取った蓆草のように二人の仲がばらばらになってもよい。／寝てからはどうともなれ」。古いのが古くありません。原初的な興味が古典にはあり、その後の伝統の流れの中に養分が入りこんでいるように思われるのです。

岩波文庫のペトラルカの『わが秘密』（近藤恒一訳）で、対話の相手のアウグスティヌスはこう語っています——「大衆によって踏みかためられた道を避け、高きをめざして、人跡まれな道をたどるがいい」、「神に見はなされていると思うそのときに、おそらく神はきみのそばにおられるだろう」、「現世の事物にたいする愛ほど神のことを忘れさせ、なおざりにさせるものはない」。この著作はラテン語で書かれた対話篇です。ペトラルカの近代的な人間主義は、ルネサンスの文化を生む力となっただけあって、この作品でも教えを受ける対話

の相手にアウグスティヌスを選ぶとともに、キケロ、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、セネカ等秀でた古典の言及に満ちあふれています。上記のアウグスティヌスの言葉にも、孤高の生き方、神との関係について考えさせるものがありましょう。思い出されるのはキルケゴールが『愛のわざ』（武藤一雄・芦津丈夫訳）で、キリスト教は「人生を過ごすことをむずかしくし、しかも、まさに君を神の前に孤独ならしめることによってそうするのである」と論じていることです。神は現世で求めるのが不可能なほど対極に位置しているのですが、神を退けると人間存在が空っぽな混沌に陥るとあれば、どうすればよいのか、疑問は果てしなくつづくでありましょう。生きた思想のつながりの中に身をおかずして、解答が得られるでありましょうか。

ロシア国民文学の創始者と目されるプーシキンの代表作『オネーギン』では、ホメロス、ダンテ、ペトラルカ、リチャードソン、スコット、バイロン、シラー、ゲーテ等が活用されているのに接することができます。彼の抒情詩から「悲歌」の一節を引くと——「けれど、おお、友よ、わたしは死にたくない／考えたり、苦しんだりするために生きたいのだ／悲しみや、気づかいや、ただならぬ不安の中で／愉悦がやってくるのを、わたしは知っている」（稲田定雄訳）。苦しみのない人生はどこにもありません。この詩行には、それを受けとめて生きていこうとする前向きの姿勢がうかがえます。アメリカのサリンジャからは、東と西の密接なつながりが読みとれます。『ライ麦畑でつかまえて』の中で、西洋哲学よりも東洋哲学の方に満足を見出す、と一人物に言わせているだけではなく、『フラニーとズーイー』は古今東西の人物、作品名の言及に満ちています。「ウパニシャッド、金剛経、エックハルト」、あるいは「イエス、釈迦、老子、慧能……」と並べてみたり、『バガバッド・ギータ』、マークス・アウレリウス、一茶、エピクテートス等の引用を列記したり、スズキ博士やマックス・ミュラーの『東洋の聖典』も飛び出すありさまで。この小説の一つの手法のように思えるほどです。学ぶべき足がかりは限りなく存在します。

「この世はすべてお芝居で／男女はすべて役者に過ぎない」（ジェイクーズ）の名句で知られるシェイクスピアの『お気に召すまま』では、「馬鹿は自分を賢いと思い、賢い人は自分が馬鹿であることを知る」（タッチストーン）

と言われます。高慢な態度ほど学問からかけ離れたものではありません。「時間というのは、それぞれの速さで進む」(ロザリンド), というせりふも味わうべきでしょう。忙しいというのが口ぐせになりがちですが、忙しさとは何でありましょうか。上記のキルケゴールの『愛のわざ』によれば、忙しさは永遠性ではなくて世俗性に関係するものであり、「忙しい」というのは、心が分裂し、気が散って雑多な仕事にたずさわり、その中で人間が全人間的であることができない状態」なのです。銘記したい分析です。いずれにせよ専門馬鹿にならないように、東西の文化の流れの原初性と多様性に広くなじみたいものです。

本稿は佛教大学総合研究所の「総合研究所報」(第10号)に書いた一文に筆を加えたものである。



教え子たちに囲まれて
(2002年11月9日 日本 T.S. エリオット協会第15回大会 於佛教大学)